

臨床医的知と歴史学

大江 一道

昔の話になるが、六〇年安保の翌年、古代ギリシア史家の太田秀通氏が東京都立大学の海外研究員として、初めてアテネに一年間滞在し、ギリシアと近東の遺跡や遺物を調査、目撃した。そのときの感性的な印象を基礎にして古代地中海世界を語った『地中海文明印象記』（右波書店、一九六三年）は、今ではほとんど入手できない本だが、歴史という学問をするものにとって、じつに貴重なかずかずの示唆をあたえてくれる。

太田氏が提起する問題は、ひとくちでいえば、まわりくどい文献資料による研究とおして築かれる歴史社会の全体像と、感性的事実から端的に理解されるすがたとの関係、比較はどう考えたらよいか、ということであった。遺跡や遺物からえられる感性的事実によって古代の性格・特徴をひき出す方法は、直截的で直観的な性質をたしかに持っている。問題は、これが、文献資料によって抽象的理論的に究明された社会経済史や法制史や思想史が明かにする古代社会の構造なり運動の合法則性とどんな関係をもつのか、ということなのである。この関係を太田氏は、次のような巧みな比喩をつかって説明した。

熟練した観測手は、測遠機による測定の結果を必ず肉眼によ

る目測によって検討し、操作に誤りがなかったことを確かめる。機上の距離目盛は正確だが、ちょっとした操作の不備から大きな誤りが生じるのに対し、目測は細かい数字までは出せないが、その代わりそこに大きな誤りはないという性質をもつ。感性的事実からする古代の直感には、この目測のような機能があると考えられる。（二七七頁「あとがき」より）

遺跡訪問や遺物目撃に基づく直感的理解には、文献による研究とはちがった、特定の制約を受けた性質があるということ呑み込んだ上で、肉眼による目測の必要性、重要性を強調されたのであった。教えられることの多い見方である。

フロイトは、生涯にわたって考古学につよい関心を持ちつづけた。自分でも先史や古代の壺や皿、レリーフを集めて部屋に飾った。自分の精神分析を、考古学者が断片やかからから過去の文化をさぐりだす作業になぞらえたという。フロイトがウィーン大学医学部に入學した年は、H・シュリーマンが、大地の深層に眠っていたトロヤの遺跡をついに発見した年であった。フロイトが心の病を癒す方法を発見したのは、じつはシュリーマンがトロヤや戦争の存在を証明し、歴史の暗部を明らかにしたことに刺激されてであったと考えると、十九世紀末の偉大な劇的な邂逅に感動してしまふ。

才氣にみちた現代イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルクは、医学を専門としたフロイトとコナン・ドイルに共通なのは、肉眼で確かめえなごく些細な手がかり（徴候・痕跡）から、推論的パラダイム（範例）によって、さもなければ到達しえないより深い現実をとらえることができたのだ、と強調している（『神話・寓

意・徴候」竹山博英訳、せりか書房。一連のシャーロック・ホームズ物語がいま歴史学の領域で興味ぶかく見直されているのは、感性的直感的事実から全体像にむかって推論していく臨床医のまなざしが、いま歴史家に要求されているからであろう。

しばらくまえから、十九世紀末をめぐる思索やリサーチの広がりや深まりに、目をみはるほどの動きが起きている。なかでもヴィクトリア朝末期のイギリスにかんしては、まさに瞭乱の賑いである。この渦中であって、まことに生きのいい論客が英文学の高山宏氏と富山太佳夫氏の二人である。その高山氏は、「世紀末」というテクストの読解の意義を強調する理由を、この十年が「どうという一見些細な証拠を丁寧を追ってみても、情報科学と生命科学がスリリングに交錯しあう〈今〉とほとんど区別つかない知識と商業の状況が集中的に展開していたと考えなければならぬ」からだとする（『テクスト世紀末』ポラ文化研究所、一九九三年、二八七ページ）。この「一見些細な証拠」とは、とりもなおさず、フロイトやコナン・ドイルが推論的パラダイムの手がかりとした。徴候・痕跡のことであろう。この徴候・痕跡は、世紀末という時代の表層にも現れる。だが、「耽美」とか「頹廢」とかの共同幻想は、高山氏に言わせれば口ざわりのよい「表層」がたくらむ「瞞着」に、今なお綿々とあざむかれていくことになるのだ、となる。だから高山氏の仕事の戦略は、その「瞞着」に「否」を唱え、「テクスト世紀末」といふべき文化が夢中になった知と商業の冒険、イデオロギーの顕在化と抑圧の物語」に挑戦することに向かう。

西洋文化史に目を向けるものにとつては、この、「スキン・

ゲーム」に対する警告は十分傾聴しなければなるまい。富山氏もまた、耽美、デカダンス、倒錯、神秘等々の言葉一色で世紀末を塗りつぶすことを、「愚劣な趣味」と吐き捨てる。そして、シャーロック・ホームズ物語とベイカー街二二二Bの探偵の実在化に熱中するシャーロックアンに反発し、シャーロック・ホームズも、世紀末という「時代のいくつかの面を映しだす歪んだ記号でしかない」と始末をつける（『シャーロック・ホームズの世紀末』青土社、一九九三年、一一頁）。これらの世紀末文化論をふまえたうえでわたしは、フロイトやコナン・ドイルにシャーロック・ホームズがそこから世界を俯瞰した窓と目の表象に、いま歴史を学ぶものは格別の関心をはらわなければなるまいと思っている。戦後歴史学の劈頭の名著『中世的世界の形成』（岩波文庫）の初版序で石母田正氏が述べた次の文は、歴史認識における感性和理性の關係、本稿の表題である「臨床医的知と歴史学」を考えささい、半世紀の古さを全く感じさせない現在の道標である。

いかに關係古文書が豊富であっても、所詮それは断片的記録にすぎず、庄園の歴史を一箇の人間の世界的歴史として組立てるためには、遺された齒の一片から死滅した過去の動物の全体を復元して見せる、古生物学者の大胆さが必要である。この大胆さは歴史学に必要な精神である。しかしこの大胆さを学問上の単なる冒険から救うものは、資料の導くところにしたがって、事物の連関を忠実にたどってゆく対象への沈潜と従来の学問の達成に対する尊敬以外にはない。（傍点は引用者）

（おおえ かずみち・西洋文化史）